

メディアとの関わりから見た日本人と英語
—構築主義による英語力の社会問題化—

社会学部メディア社会学科4年
11DE142H 松嶋洋樹

論文要約

本論文は、世間一般において日本人は英語が苦手であると言われている現状に対し、そう言われるようになった背景および原因を、日本人と英語の愛憎半ばの関係を分析しながら構築主義の考え方をを用いて論じ、今後日本人が英語とどのように向き合っていくべきかを明らかにするためのものである。

前半では、英語教育の歴史、現代日本人の欧米文化との接触頻度、英語試験のスコアなど様々な要素が「日本人は英語が苦手である」ことの証明になりうるかどうかを検証する。

後半では、構築主義におけるクレーム申し立て活動を、公的教育機関における日本人の英語力の議論や、民間企業における日本人の英語力の問題点の議論などの実例を挙げながら、それらが国民の間で議論されていく過程を観察し、「日本人は英語が苦手である」と世間において言われるようになっていった背景と理由を明らかにする。

2015年度メディア社会学科優秀論文賞 受賞作品
(是永ゼミとして初の受賞)

卒業論文要約

立教大学社会学部社会学科4年

大山稜

2014年6月に薬物吸引が原因の自動車事故が起きた。その後「危険ドラッグ」という名称が生まれ、日本社会の違法薬物への眼差しが変容した。その在り様を、新聞記事を題材にテキストマイニングの手法によって観測した。ドラッグというものがどのような理解のされ方を経てマスメディアに媒介され、どのような意図をもって認識主体へ語られ、どのような効果によって認識するにいたるのか。1980年代から今日にいたるまでの薬物報道から報道集中期を割りだし、語句の使われ方を当時の社会背景と照らし合わせた。メディア・コミュニケーションの流れとして理解し、新聞報道が日本社会のドラッグ認識にあたる影響における課題や可能性を探った。その結果、2014年が薬物事犯の歴史の節目といえるほど影響力の大きな年だったこと、そしてそれが根絶・助長の認識体系に働きかけるものであったことを確認できた。

卒業論文 要約

12DA122B

社会学部社会学科4年

奥山智可

この論文では家庭環境と金銭感覚の関連性を調査した。まず初めに序章として富裕層と貧困層にまつわる文献を紹介し、社会現象として金銭格差があることを紹介した。そして私自身の仮説としては、人々の価値観を形成するのは、幼少期の家庭環境が基礎土台になっており、家庭環境は似たものとして受け継ぐと、この段階では仮説建てた。そして先行研究では、ライフストーリーの研究、親子関係の研究、青年の甘えに対する研究についての3つの論文を先行研究として紹介した。インタビュー調査は22歳の4人の男女を対象として行った。会話形式で紹介することでよりリアリティのある調査となっている。最後に結論として、まず3つの先行研究との比較を行った。その上で自身の結論としては「根本的な金銭感覚や価値観というものは、家庭環境が影響を及ぼしている」と結論付けた。

卒業論文要約

Twitter の「中の人」から考える企業広報

2016/1/21
12DE063L 秋山望

Twitter を用い企業と一般のユーザーがコミュニケーションを行うことが多い。その中でも企業が一般のユーザーに話しかけたり独特の口調を使い発信することがある。このようなアカウントは企業公式アカウントと呼ばれ、その Twitter を運用する人は「中の人」と呼ばれることが多い。

企業広報の歴史などから企業広報の意味を考え、実際に企業が様々な SNS サービスで発信した企業広報の事例や企業公式アカウントの発信内容を分析した。Twitter 以外での取り上げ方なども分析し、企業公式アカウントが一般のユーザーに受け入れられているのかについて考える。

企業広報の考え方は時代に関わらず変化せず、企業公式アカウントの動きとも合致していると考えた。企業公式アカウントの Twitter の使い方は企業の注目を集めているが、一般のユーザーの注目はまだ少ない。しかし企業と一般市民がコミュニケーションをとることができる企業広報の手法は一般的になると考えた。

要約

本論文では、中学生に関する近年の二つの現象、「親子、教師・生徒関係のフラット化傾向」と「中学生のネットコミュニケーションによる諸問題」を関連付けて考えることで、今後の社会を担う大人として成長していくための自我形成において重要な時期である中学生の現状に迫り、それが現在とこれからの社会のありようを考える端緒になるのではないかという問題意識から分析を試みた。

そこで、まずネットコミュニケーションがフラット化に及ぼす影響を検討し、また逆に、フラット化がネットコミュニケーションに及ぼす影響も検討した。その結果、ネットコミュニケーションによってフラット化は促進されるが、同時にフラット化は不安を生み、それを媒介にすることでネットコミュニケーションへの嗜癖を焚き付ける可能性があることが明らかになった。

次に、社会背景からなぜ不安が生じているのかを検討し、不安はリスク社会における個人化からもたらされており、その不安がフラット化やネットコミュニケーションへの嗜癖にも影響を及ぼしていることを明らかにした。

最後に、そのような現状に対する提案として、社会政策による個人化した存在を包摂する仕組みづくり、ネットコミュニケーションを社会関係資本として利用するための仕組みづくり、オンライン空間と現実空間をつなげる工夫、草の根的な不安の解消の四つを挙げた。

2015年度卒業論文要約

テーマ：商業施設が求められる変化とは～ららぽーと TOKYO・BAY を例に～

12DE076J 磯部楓

コンビニと同じように市場拡大を続けているショッピングセンター。誰しもが訪れたことのある空間かつ常に飽きさせない消費の場であるが、この業界がどのように変化してきたか調査した。さらに、日本のショッピングセンターの先駆けと言われる千葉県船橋市のららぽーと TOKYO・BAY が日本の代表する商業施設であり続けた要因とは一体何かをという点を中心に分析していき、今後の展開を考察した。

1章では消費者の余暇活動の変化と市場におけるショッピングセンターの成り立ちと現状について触れた。2章では今回研究対象としたららぽーと TOKYO・BAY の移り変わりを社会動向に合わせて時代分けしてみた。3章ではこの施設を利用するユーザー側にインタビュー調査を行うことで、捉えられ方を明らかにした。4章で社会学におけるショッピングセンターの先行研究を紹介し、5章で今後の高齢化社会、ネット社会に対応していくための考えを述べた。

「テレビドラマの海外展開における課題とその展望」

各国の異なる文化を理解するにあたってコンテンツ交流は重要な意味をもっている。しかし日本のコンテンツ文化の発信力は低い現状にある。一方韓国は、韓流ドラマの流通を成功させた。日本との大きな違いは、現地化戦略をしているかというところにあった。過去のトレンドドラマは日本社会の新しい価値観を表現し、海外で大きな支持を得た。しかし現在のドラマ制作者は国内の視聴率しか視野に無く、話題性のみの配役などドラマ自体の質が下がってきている。国内の変動に左右されず制作者たちは何を表現したいのかを考え、制作していくことが日本ドラマ本来のストーリー性の回帰につながる。つまり、現地化戦略を意識したドラマ作りには、海外で評価の高い日本のドラマのストーリー性を重視した制作と、その制作者の意識の変化が課題といえる。さらに日本ならではの新しい価値観の切り口が描かれたドラマであれば、今後海外で通用していく展望があるといえる。

オリーブの時代とその影響—80年代以降における40代女性像の変化—

12年ぶりに復活を遂げたファッション誌『Olive』は、1980～90年代の10代少女たちに大きな影響を与えた雑誌である。

そんな『Olive』の歴史や当時の少女たちに与えた影響などを振り返りながら、1980年代から現在にかけての40代女性像の変化について考えた。1章では、女性ファッション誌の始まりとOliveの歴史について、2章では80年代～現在までの40代女性の社会的立場の変化について、3章ではOliveの恋愛面について、3つの視点から赤文字雑誌ViViと比較した。4章では、「女子」の意味や誕生の背景について、さらに「大人女子」の定義や〇〇女子と呼ばれるようになったきっかけ、Oliveとの関わりについて考えた。5章ではアンケート調査、6章では40代女性のこれからについて論じる。

以上の結論として、女性誌と女性の社会進出は大きく関わっており、この雑誌との関わりが“女子”誕生の要因の一つであり、その中でも大きな役割を果たしたOliveは、女子文化の先駆的存在であった。そして、「かわいい文化」が浸透した時代に生きる私達若い世代は、女子要素を持っている大人女子的な生き方を憧れの対象とするのではないだろうか。

卒業論文要約

社会学部メディア社会学科

12DE121D 後藤沙貴

◆ 内容構成

この論文は、女性・若者に視点を当て今後の「働く」と「プライベート」のバランスについて考えていくものである。

最後の章では、過去の労働状況を知った上で「働く」と「プライベート」のバランスについての現状を把握し、バランスをうまく測る為にはどのような課題があり、何が求められているのかをはっきりさせたうえで、若者や女性が望む「働き方」の実現には、今後どうしていきべきなのかを解決策として述べ、まとめていく。

1章：『労働時間の問題視とワーク・ライフ・バランスの重要性』

社会状況の変化に伴って個人の「働き方」に対する意識の変化を背景に、高度経済成長期から今日にかけて長時間労働が問題視されはじめ、ワーク・ライフ・バランスの重要視がされはじめていることが明らかとなった。

2章：『労働状況・離職とその理由・職場に対する満足度と認識からみたワーク・ライフ・バランスの重要性と職場に対する理想・女性活躍に対するイメージ』

長時間労働をする人や休みが取れない人が職場にいるという職場に対する認識が高く、労働時間や休暇の問題は離職に大きく関わっていることがわかった。¹また、男女間で「女性の活躍」に対するイメージの差が存在していた。その意識的な差を埋めることや、環境がどんなに整っていたとしても、活用する側の意識を改善していかななくてはならないということが、課題になっているのだと明らかになった。

3章：『ワーク・ライフ・バランスの活用状況（有給消化等の）と活用されていない理由について』

¹ 独立行政法人・労働政策研究・研修機構『正社員の労働負荷と職場の現状に関する調査』 2015年 P66~76

年次有給休暇の取得できない理由として、性別でみると男性は仕事の量、女性だと職場の雰囲気を感じている傾向にあった。年齢でみると、若年層は仕事量・職場環境・雰囲気を不安にしている。配偶者の有無でみると、配偶者ありの人では家庭を支えていくために、男女とも職場からの見られ方を重要視している傾向にあった。また、年次有給休暇の取得を希望できない職場には、「職場環境や仕事の状況」「社内での情報共有が乏しい」「社員の不足」という問題を抱えていることから取得に踏み出せていないと考えられることが明らかとなった。²

4章：『インタビューとそのまとめ』

職場選択の基準として、ワーク・ライフ・バランスの思考がみられた。また、入社前後でのイメージの不一致が少なからず存在していることが明らかとなり、現在理想の働き方とは少し違っているというような傾向がみられた。また今後、理想の働き方に変えていくためには、自分の成長が前提にはあるものの、社内の雰囲気や先輩社員、会社全体が制度を積極的に活用していくこと、環境を改善していくことを望んでいることがわかった。

5章：『インタビュー結果を踏まえて見えた課題とその解決策として取り組んでいくこと』

「職場環境の改善」・「制度に対する取り組み方の改善」・「個人の取り組み方に対する改善」の3つの課題を提示し、「ワーク・ライフ・バランスの実現」に向けての解決策をまとめた。また、この論文目的でもある若者や女性が望む「働き方」の実現には、「ワーク・ライフ・バランスの実現」は重要なポイントであること。その理想の実現のためには、企業側の職場環境の改善や、取り組み方の改善が必要であり、同時に個人の意識を高めることが重要になっているということが明らかとなった。また、学生の時期から自分の将来を見据えて行動できる人間こそが、理想を現実にできるのだろう。

² 独立行政法人 労働政策研究・研修機構『日本人の労働時間・休暇～残業・年休未消化と意識・職場環境～』2012年 P63~86

卒論要約

社会学部メディア社会学科

12DE124L 田中輝一

本論文のテーマは、「犬・猫の殺処分ゼロを目指して～人の意識を変える PR～」である。現在の日本はペット・ブームを背景に、子供の人数をペットの数が上回っている反面、ペット問題が社会問題化している。その一つが「殺処分」である。人間の手によって作り出された命が、人間によって奪われているのである。そのことに疑問と危機感を抱き、殺処分をゼロにするため、まずは人間の意識を変えていくことの必要性を感じ、現状の背景を考えながら、パブリック・リレーションズの観点から人の意識を変える方法を探る。

1章では、日本の殺処分の状況や動物愛護の歴史などを調べ、殺処分問題の根本を担っているのが何であるかについて考察する。

2章では、1章で見てきた現状の問題点を解決するために、パブリック・リレーションズを用い、人の意識を変える具体的方法論を考える。

3章では、動物愛護が進んでいる諸外国（ドイツ・イギリス・アメリカ）の実例から、殺処分を少なくしている制度や人の意識を学ぶ。1章で扱った日本の現状と比較をすることで、日本の問題点を浮き彫りにし、どの点に対してパブリック・リレーションズを用いた働きかけをすると効果的であるかを考察する。

4章では、横浜市動物愛護センターの事例研究を行う。実際に、動物愛護センターではどのような活動が行われているのか、どのような人の意識を変える行動がとられているかを調べ、その改善点を1~3章までの内容を活かし考える。

卒業論文要約

社会学部メディア社会学科

12de152k 千々岩聖都

私は、現代において若者の生活の大半をメディアが占めていることに興味を持ち、その中でもインターネットが与える影響はどのようなものがあるのかということに疑問を持ち、「インターネットと暴力」という論題で論じてきた。インターネットの影響の強さというものを差別化するにあたり、他のメディアのテレビやテレビゲームが与える影響も論じながらインターネットと共通する部分と異なる部分を提示しながら論じている。インターネットでは身体に与える影響はもちろん精神的なダメージを与えることも大きいことが、他のメディアと異なる部分である。例えばネット上での誹謗中傷や炎上などが挙げられる。このようなものから、若者を守っていくためには何が必要なのかということも考えながらこの論文を作成した。

「組織不祥事におけるリスク対応－立教大学のリスク・マネジメントに向けて－」

近年、日本の人口減少により、大学間競争は激しくなっており、この競争を生き残っていくためにはブランドイメージの維持が必要不可欠である。本論文は立教生による不祥事や事故、マナー違反など大学のイメージ低下につながりかねない問題に対するリスク・マネジメントについて考察したものである。私立大学であるという性質上、営利的、非営利的な側面があるため、それぞれの組織におけるリスク対応について考え、段階を踏むことで立教大学の考察を試みた。これらの考察から、リスクが表面化しないために組織としていち早くリスクを察知し、予防に向けた行動をとることが重要であり、組織のトップやミドルがその役割を担っていくべきであるということが明らかにされた。特に学校においてはミドル層の果たす役割が重要であり、学生部が行っている個々のリスク対応についてその有効性と改善可能性について検討することで、立教大学の今後の指針を示した。

家系図ブームとその社会背景

近年、「家系図」がブームになっている。テレビや雑誌で「ルーツを探る」「家系図をつくる」などの特集を多く見かけるようになった。

本来、家系図は家制度のもとで家産の維持と祖先祭祀の承継のために、家の連続性ということが重視された時代に作られたものであったが、社会の変化に応じてその存在意義も変化してきた。

少子高齢化が進展し、家族が果たしてきた役割が不安定になったことにより、人びとはより強い、より安定した拠り所を求め「伝統志向」や「まじめ」志向となっている。

また高度経済成長の終わりとともに、将来への不安が増したことが、家族関係における伝統志向への回帰の傾向として、先祖や家系図に対する興味へとつながっていると考えられる。家系図を作成し自分のルーツを知るということは、世代を超えた家族や一族の絆を認識し、自分の拠り所や存在を確認することにつながっている。

1990年代後半から、パソコンやインターネットの普及率が急激に伸びたことも家系図ブームに大きく影響しており、情報環境やコミュニケーションのあり方の変化は、今後、家族のあり方をも何らかの形で変化させていくと考えられる。

多角的にみるライトノベル
～ライトノベルと一般文芸の分離と越境～
要約

ライトノベルは一般文芸と異なる様々な起源とそれに伴う特徴を有している。それこそが批判の対象であり一方で業界隆盛の要因であることが歴史を振り返ることで理解できる。また、ライトノベルはその起源に唯一性を持たず、それぞれの起源が歴史の中で作用しあうことにより現在のライトノベルが形成されていたことがわかった。歴史の中でライトノベルはゲームやマンガ的要素を取り込み「キャラクター小説」としての性質を有した。反対に「キャラクター小説」であるからこそライトノベルはその他のオタク系文化との類似性や強い親密性を持ち、コアファンの獲得に成功、またメディアミックスに適したコンテンツへと進化していった。シミュラクルが氾濫するようになった現代社会において読み物としてのみの価値ではライトノベルは成立も成功もしない。変化するメディアにどのように対応していくかがライトノベルの今後を左右すると考えられる。

ダイエットの歴史から、今のダイエット・ブームに至るまでの経緯を明らかにし、日本人の体型の推移を見ることで、瘦身願望が女性特有のものであり、近年更に女性の瘦身化が進んでいることが分かった。若者女性のダイエット行動の現状から、ダイエット行動は、自己体型評価が関わっており、体型に関係していないことが分かった。女性雑誌の「ダイエットをすることで得られるメリット」を伝える記事や、女性らしさ＝痩せていることという認識が瘦身願望に影響していると仮定し、マス・メディアの痩せの取扱いについて明らかにした。結果、マス・メディアは女性の瘦身を促す様な記事が多くあることが認められた他、女性雑誌を好んで読む人程やせを理想化していた。しかし、ダイエット知識が少ない人が多く、メディアリテラシー教育の重要性を指摘した。また、インタビュー調査の結果から、ダイエット行動にはマス・メディアの影響を受けているか受けていないかで、方法や行動、そして理想の身体像が違っていることが分かった。